
青山宏夫先生を送る

大久保純一

用務があつて青山先生の研究室を訪ねると、白衣を着て机に向かっていた先生はおもむろに立ち上がり、穏やかな表情で当方に対応して下さる。あるいは、部屋の中央の大机に広げた地図に落としていた視線を上げ、邪魔されたことにいらだつ風もなく、こちらの頼み事に耳を傾けて下さる。室内も見事に整理整頓がゆき届いている。執行部も何度かご一緒させていただき、副館長同士で膝突き合わせての相談の機会も多く、また、海外での調査やシンポジウムにご一緒させていただいたこともあるが、先生が感情的にふるまったり、怒りで声を荒げたりするのを見た記憶はない。先生に対する私の印象は、あくまでも几帳面で冷静、理性的な人である。それでも執行部メンバーでの慰労会などで酒が入ると陽気にたわいない冗談に打ち興じる、普段の御姿とのちょっとした落差がチャームングでもあった。

先生のご専門は歴史地理学である。その研究においては、景観や地域が歴史的に形成される過程を課題とし、古地図をもとに広域の空間と時間の中に対象地域を位置づけて、その景観の復元をおこなうもので、和泉国日根野荘、武蔵国鶴見寺尾、陸奥国慧日寺を中心とした地域、備前国足守荘など、日本各地の広い領域にわたる。実証性と鋭い洞察により、中世の絵図研究に新しい地平を切り開いてこられた。また、より大きな視点から日本図の研究にも大きな成果を上げられ、古代の想像的な地理観による概念的地図から、西欧の世界図との接触により変容した地図にいたるまで、個々の地図に関する地理的知識の緻密な分析・解読と長い歴史を見通す俯瞰的視野により、前近代の日本図から読み取れる国土観を明らかにされた。その成果をまとめて2006年に母校京都大学で博士号を取得され、翌年に単著『前近代地図の空間と知』（校倉書房）として上梓された。さらに一部は当館の総合展示第3室「絵図・地図からみる近世」のコーナーに可視化されている。

先生の研究スタイルに関して専門外の私がコメントする資格は本来ないが、それでも共同研究などの場で垣間見せていただいた印象を言わせていただくと、普段の物腰と同じく、きわめて理論的で緻密である。それでいてスリリングな結論を導き出す過程には目を瞠らされ、まるで隙のない推理小説を読んでいるような手並みの鮮やかさを感じさせてくれる。先生がプロジェクト代表となって実施した2011年度企画展示「風景の記録—写真資料を考える—」では、幕末に愛宕山から撮影されたベアトの江戸景観の写真を、写り込んだ建物の影の長さなどを周年の太陽の動きなどと合わせて分析し、ピンポイントで撮影時期と時間を特定された。またドイツのシーボルト子孫の家に残る伊能図に関連する地図の調査においては、トレースの際にできる微細な針孔に着目して地図の来歴を明らかにするなど、通常気づきそうもない手がかりをもとに証拠を緻密に隙なく積み重ねていく手法に舌を巻いた記憶がある。

先生は日本海の呼称に関する歴史の研究に関しても第一人者として知られている。その評価にも

とづき招待された2009年の日本地理学会の春季学術シンポジウムでの討議をもとにした『『日本海』呼称の起源と現状』(E-journalGEO 第4巻第2号)により、2010年度の日本地理学会賞(論文発信部門)を受賞された。かつて筆者は日本海呼称問題に関して世間話の延長で先生に話を振らせていただいたことがあるが、素人の何気ない質問を適当にあしらうことをせず、翌日ご自身の書かれた論考をコピーして私の研究室まで届けてくださった。冒頭から書いてきたように、その物腰、学問に対する姿勢など、いい意味において真正の「学者」であられる。

研究者として高い力量を示される一方、歴博の運営面に関しても、青山先生の功績はきわめて大きい。先生は執行部役職に合計三度も就かれている。研究推進センター長、副館長(館内担当)として研究・管理両面において館の活動をリードし、副館長(館外担当)に就任後は評価や財務を中心に館務を差配するなど、歴博の第二期から第三期への移行期という難しい時期に運営の中核を担われた。前述のように筆者も先生と執行部をなんとかご一緒させていただいたが、その論理的で的確な判断は当時の平川館長および久留島館長から厚い信頼を得ていたという印象がある。

こうした執行部の一員としての功績に加え、歴博の運営に関して青山先生の功績として特筆されるべきは、将来計画検討会議での活躍であろう。2004(平成16)年に歴博が人間文化研究機構を構成する一機関となり、機構内外での館の存在意義の明確化と研究および諸事業の基本方針の策定が喫緊の課題となる中で、先生は新たに組織された第2期将来計画検討会議の議長という大役を担われることとなった(当時の平川館長の信任が厚かったからに他ならない)。この会議において、未来を拓く歴史展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与するというミッションの確立および、研究・資源・展示の有機的連関による「博物館型研究統合」の理念の構築を理論面で主導した功績は大きい。往々にして論点の拡散や脱線をしがちなこの種の会議において、持ち前の高度な論理構築力をいかんなく発揮され、議論を方向付けて理論化にまでこぎつけたのは、先生の手腕によるところが大である。この「博物館型研究統合」は歴博の研究活動の柱となるべき理念と位置付けられ、その後の将来計画の検討や諸事業の計画・立案などさまざまな局面に生かされ続けている。今後も歴博は博物館としての看板と機能を持ち続ける限り、その将来を見すえて進路を定める局面においてかならずこの「博物館型研究統合」の理念に立ち返ることが必要となる。そのとき、第2期将来計画検討会議の議長としての青山先生の存在も思い起こさなければならぬだろう。

定年を2年後に迎えた2020(令和2)年、先生は歴博に籍を残したまま、機構本部の理事に移られた。筆者は、もう十分執行部も長く勤めてこられたのに、なぜわざわざ面倒をお引き受けになるのか、自分だったら残り2年は好きな研究だけやらせてもらうのに、などと不躰に面と向かってお尋ねしたことがあるが、その折は微笑されるだけでお答えはいただけなかった。しかし、今から思えば、第4期を目前に控えた機構の行く末に対して深く思うところがありだったのだろう。沈着冷静な論理の人という筆者の理解は表面しか見ていないもので、実は内に熱いものを秘めた人であるのかもしれない。この原稿を書かせていただくにあたり、先生が広報誌『歴博』にお書きになった「研究者紹介」を久しぶりに読み直した。たんに地図を資料として分析するだけでなく、当該の地図に描かれた道なき野辺に果敢に踏み入って現地調査する(その中で、不審者扱いされたり、ドーベルマン犬に追い回されたりという微笑ましい?エピソードも出てくる)という研究手法が書かれ

ている。実は強い意志と不屈の行動力も持つ人であることに、不覚にも今頃になって気づかされたのである。

先生には今後も歴博をご指導・ご支援くださるようお願いしたい。末文ながら、ますますのご発展とご健勝をお祈り申し上げるものである。